

[論 文]

# 自閉症幼児の情動調整困難に対する臨床的研究

—身体感覚への働きかけによる支援経過から—

富 澤 佳代子<sup>\*</sup>

Key words : 自閉症、情動調整困難、情動的コミュニケーション、身体感覚

## はじめに

自閉症児が示す情動調整困難や情緒不安定は、家族や支援者に介入の難しさを感じさせやすく、療育相談場面において対応困難場面としてしばしば話題に上る。情緒不安定や情動調整困難は、何らかの要因により対人・対物を含めた外界の環境との不調和を抱えた際に、強い情動の表出を伴って現れる行動であり、情動を伴う身体表情は反響性や伝染性が強いとのやまだ（2010）の指摘や、小林（2008）による情動は他者と共振する性質を有するとの指摘がある。これらの指摘に目を向けると、介入を必要とする場面では支援者も情動の揺らぎを感じながら応じており、表出された行動と対応とが交わりにくく、期待する変化が起きない場面对応困難と判断されると考えられる。ここには情動の表出と受け止めの難しさという情動的コミュニケーション（小林、1998）の躓きがあるといえる。

自閉症児の支援においてこれまで情動に直接かかわって行くという考えは少なく、情動問題は発達の阻害要因として捉えられてきたとの佐々木（2008）による指摘がある。しかし、情動調整困難は、何らかのきっかけによって生じた情動の揺れと高まりを自己調整することが困難な状況で、環境に情動を表出して調整を図ろうとしているとも理解できる。支援者との間で情動を介したコミュニケーションが生じる場面ともいえ、情動そのものに働きかけていく支援が求められると考える。先に挙げた小林（1998）は、身体水準で共振する関係を形成することが情動の共有につながると指摘し、今野（1999）は触覚や固有感覚によって伝達される情報が最も基本的なコミュニケーション手段であるという。そこで、本研究においては、情動調整困難が問題となっていた自閉症幼児に対し、触覚、固有感覚、前庭感覚を通して伝わる身体感覚に働きかける活動を行い、情動的コミュニケーションの形成支援を行った。臨床経過から情動調整困難の発達理解と、臨床支援方法について検討する。

---

※ 淑徳大学兼任講師

## I 自閉症における情緒不安や情動調整困難の理解

### 1. 情緒不安や情動調整困難とコミュニケーション

自閉症児の情緒不安や情動調整困難について宇佐川（2007）は、内に向かう情動系と外に向かう情動系の二つの枠組みを用いて情緒を理解するとし、内に向かう情動は発達初期にみられ、外界遮断や情動の混乱につながりやすく、外に向かう情動は不安や恐れ、ふざけや攻撃という形で現れるという。また、発達初期における前庭感覚、固有感覚や触覚といった初期感覚を働かせて外界へ向かおうとする心理・運動的な姿勢の躓きは、外界に対する漠然とした不安緊張や身体を通した外界との交流のうまくいかなさにつながることを指摘する。今野（1999）は、感覚過敏や覚醒水準の調整不全が身体体験の共有の困難さにつながると述べる。他者から触れられることによって対人信頼感を形成していくと同時に身体感覚を通して今ここにいる自己を形成していくことは、重要な発達の過程であるが、自閉症児の感覚過敏による身体体験共有の困難さは非言語コミュニケーション手段の獲得を難しくする上、外界にかかわる際の心身の構えを強くし、情緒の安定性や外界へのかかわりにくさに大きく影響する。

筆者は、高い認知機能を有する自閉症児者に対する臨床支援の中で、彼らが情動調整困難場面について語る場面に向き合ってきた。彼らの説明によると、強い感情の高ぶりとはほぼ同時に、立ち止まったように動きが取れなくなってしまうような感覚に襲われること、そのまま動きが取れなくなってしまうこともあれば、思いつくままに言葉を発することもあるが、あとから思い返すと記憶が曖昧で、感情の高まりや興奮はある程度時間が経過するまで調整しにくいということであった。この説明は、自閉症児の話し言葉が身体の体験世界とかけ離れているという指摘（今野、1986）と重なる。つまり、彼らは自らの情動を情報としてキャッチし、表出することの難しさを抱えており、表出された言葉や動作が、体験やそれに伴う情動の揺れと一致していない可能性がある。

串崎ら（2009）は、自閉症児は情動的コミュニケーションがうまくいかないことを指摘し、感情の表出、情動的コミュニケーションに焦点を当てた介入がコミュニケーションの支援につながる可能性を明らかにしている。また名倉（2012）は、自閉症児は他者との相互主観的な経験の難しさから情動共有を伴う共同行為が成立し難いと述べ、情動調整の発達を促すために情動共有に向けた支援の重要性を指摘する。

これらの先行研究からは、情動調整困難の背景に非言語コミュニケーションの育ち難さがあり、前庭感覚、固有感覚や触覚といった初期感覚の受容体験による外界への不安緊張の軽減や身体体験の共有による情動共有に向けた支援が支援方略として見えてくる。

### 2. 身体感覚の共有、身体へのかかわり体験

身体感覚へのアプローチ、実体験による感覚的なフィードバックを他者との二者関係の中で体

験していく方法として、動作法が知られている。動作法は、肢体不自由児の支援から始まった臨床実践技法であり、動作の改善、身体感覚を育てるアプローチ、リラクゼーションや自己への気づきを促すアプローチとして肢体不自由児の支援から発達障害の療育支援へ、さらに精神科領域での心理療法へと応用されている。身体に働きかけるアプローチは外界への気づきや自分自身への気づきにつながると考えられ（宇佐川2007, 今野1986）、今野（1988）は身体に対する気づきが自閉症児の行動変容に関係しているとも指摘する。森崎（2002）は、自閉症児への臨床動作法による訓練の経過から、他者が働きかけてくる存在としてとらえられるようになったことを報告し、自己と自体という自己に閉じた対人関係から二者関係の成立へと移行したと考えた。また森崎（2009）の実践は、身体的な相互交渉を通して子どもと注意を共有し、安心を育む過程でもあった。このように、動作法は、身体に直接的にアプローチするという側面と、訓練者と対象児の間において身体を通してコミュニケーションを行う側面も持っている。身体を介したコミュニケーションに伴う身体体験や情動共有の経験は、初期感覚を働かせて他者を確かめ、外界へ向かう姿勢を育てることにつながると考えられる。

## Ⅱ 事例 自閉症幼児の情緒不安に対する身体感覚への働きかけ

他者の介入による情動調整が困難であった自閉症幼児に対し、外界への不安感の軽減、要求伝達の方向の定位を目的として、身体感覚に働きかけ、身体体験と情動共有を目指した活動を実施した経過から、対象児の情動表出方向の変化や情動調整困難への支援方略について検討する。

### 1. 対象

#### (1) 対象児

A児：4歳女児、幼稚園年中、自閉症。

#### (2) 成育歴及び教育支援歴

2,500g未満の未熟児、吸引分娩で出生し、黄疸により10日間保育器に入った。身体運動面の発育には遅れは認められなかったが、乳児期より泣いてばかりいて、母親と祖母以外の他者のかかわりを強く拒否していた。睡眠や食事はA児のペースで、昼夜逆転し生活リズムが著しく不規則であった。急に怒り出して泣く、やり直しを嫌って不安定になることが一日に何度も繰り返され、A児の求めに応じて介入しようとするときにさらに情緒が乱れた。この状況に母親は疲弊し、家庭では大きな問題となり、2歳5ヶ月より筆者の関わる相談機関において週1回の個別療育支援を開始した。療育開始以降生活のリズムが少しずつ作られ始め、その後3歳4ヶ月で幼稚園に入園した。

幼稚園入園後は、しばらく泣いて過ごすこともあったようだが、半年ほどで落ち着いて過ごせるようになった。集団から大きく外れることはなく、教室内にとどまっていられることもあって

幼稚園での過ごし方はA児のペースに任されており、情動調整困難場面が生じることはほとんどないとのことだった。

### (3) 支援期間と支援の構造

2歳代から5歳代までの3年間。2年間は個別療育のみを週1～2回実施、3年目は母子分離で個別療育と集団療育を組み合わせた週2回3セッションの療育を行った。筆者（以下Th）は療育2年目の終わりから週1回60分の個別療育を補助の実習生（以下Ath）とともに担当し、本研究の検討対象とする身体感覚への働きかけ活動は療育3年目に実施した。

### (4) 療育3年目、身体へのかかわり活動開始時の臨床評価

#### ①発達検査

4歳4ヶ月時に実施した新版K式発達検査2001では、P-M 52 C-A 35 L-S 17 全領域33であった。

#### ②臨床観察による評価

小柄で、やや尖足気味でふわふわと歩いているように見え、膝を曲げて姿勢をとることが難しくトランポリンやトンネルくぐりを苦手としていた。はめ込む、入れるタイプの教材によく取り組み、簡単な色や形の弁別ができた。一度使用した教材教具は、同じ使い方に固執するところがあり、新奇の教材教具にはなかなか手が出なかった。食器類の玩具を手にするとお皿を洗う動作に没頭して繰り返した。さらさらした砂や粘土、ざらついた面などに触れられず、楽器音や機械音は苦手目にしただけで首を振って嫌がり、触覚過敏と聴覚過敏が認められた。

A児の方から他者に近づくことはあるが、かかわられると身体全体に緊張が走り、身動きが取れなくなることがあった。繰り返された日常生活動作に関する声掛けを理解し、応じることはできていた。発語はなく、不快な時にまれに「ン」と発する、人形にご飯を食べさせる場面で「アーン」と発したことがある程度で発声も少なかった。特定の場面で決まった手遊び歌を要求するために身振りの一部を表出することや課題を終えたいときに手を合わせる動作が時々表出された。要求伝達の際には、切迫した表情で「手招きするように盛んに手を動かす」「手を上げる」といった動作が表出される。要求に応じようとすると払いのけて拒否し、再び手招きや手を挙げる動作が見られる。これを繰り返すうちに情動が乱れ調整が困難となった。また、はめ板がうまくはまらずやり直しを必要とする場面で頭をポンと叩くなどの動作が見られた後同様の状態となることもあった。これらの動作は、要求する人物や対象物に向かわず、空間に向けて表出されていた。

集団療育では、一歩引いたように他児の動いている方向に目を向けて笑顔でいることが多く、情動が大きく乱れることはほとんどなかった。かかわられることを強く拒否する様子はないが、受身に見え、楽器なども自分で操作することは少なかった。状況を理解して落ち着いているというよりも参加できる活動や場面が限られていると考えられた。

これらの様子から、応じられる範囲が狭く、限られており、限られた状況ではあるが部分的な

模倣が見られる。伝達意図が感じられる行動が表出されることはあっても人や物に向けられていないことも多かった。そのために、支援者は勘で応じることになり、コミュニケーションに齟齬が生じやすい状況にあった。齟齬が生じてしまうと再度伝達する必要があり、より情動が乱れることにつながった。身体の動きからは硬さが窺え、聴覚の過敏さや触覚の過敏さなど感覚の過敏さを持ち合わせていた。

情動調整困難時に見せる手招きなどの行動は、外在的情動調整を求める発信であると考えられ、介入を求めているながら支援者が近づくると混乱する様子は、小林（1998）の指摘する自閉症児がアタッチメントをめぐって葛藤を起こしている姿と考えた。また、手招き動作を人や物を要求しているサインと理解して応じると大きく情動が乱れており、手招き動作を具体的な人や物を要求するサインというコミュニケーションの意味を持つと理解することに疑問をもった。そこで、身体感覚を介した情動的コミュニケーションを促す支援を個別療育時間中に取り入れ、外界の刺激の受容域を広げること、要求表出が人や物に向けられることによって情動調整困難場面において外在的調整がしやすくなることを支援の目標の一つとした。

## 2. 研究の視点、方法

療育3年目にあたる20xx年5月（4歳8ヶ月）から20xx+1年1月（5歳4ヶ月）までの9か月間においてThが担当した週1回60分の個別療育時間中に行った身体感覚への働きかけ場面の経過を対象とする。DVD録画した支援記録、観察記録をもとに活動の内容やA児の様子を分析の対象とした。

## 3. 臨床支援の結果

### (1) 第I期 身体感覚への働きかけ開始期

活動の内容を図1に、A児の様子を表1に示す。

セッション	1	2	3	4	5	6	7	8
活動内容	シフォン スカーフ でゆっ りふれる	机上に 伸ばし た腕に 指先で 触れる	机上に伸ばした腕に アクリルボールなどで 触れる		机をはずしてアクリルボールなどで 上半身を中心に触れていく			
			トランポリン		机をはずして掌でふくらはぎに圧を加える。			

図1 第I期 身体感覚への働きかけ活動内容

他者からのかかわりを回避する傾向のあるA児にとって身体に直接触れられるという新たな活動は侵襲的に感じられる可能性があること、感覚過敏から大きく情動が乱れることが想定された。そのため、A児のわかりやすい構造を足掛かりにし、A児の受け入れ可能な範囲を見極めな

表1 第Ⅰ期 A児の様子

活動中の様子	Thの歌に意識を向けている様子が見られ、手遊びをを求めるサインが出ることもあった。腕や足に触れると、全身に力が入り、緊張感を伴いつつも、Thの動きに注目し、感覚を受容していた。歌の終わりにこちらが促すともう一回とサインを表出した。足圧の場面では、弛緩のタイミングや歌の終わりに発声があり、触れてほしい部分を指さしや手差しなどで伝えた。トランポリンでは向かい合い、抱き上げるようにしてジャンプを支えると、段々とThの抱き上げとA児の体がしっくりくるような感じ。アイコンタクトがとれるようになり、ジャンプをしようとひざを曲げた。4回目の活動時には手を挙げて発声しはっきりと要求が表出された。
情動表出場面	促しによって要求動作が見られるようになって以降、少しずつ掌を見せて頂戴の身振りを出さるようになった。Ⅰ期の終わりには、苦手な課題で「えーん」と泣き、Thにあやされると体を預けて気持ちを持ち直す場面があった。また、Thが退室しようとするとき泣き出し、分離不安を示した。それでも退室しようとするとき、Thに向かってサインを表出し意図を伝達することができた。

から活動を展開した。例えば、1回目の活動は、カラーのシフォンスカーフを用いてThとの距離を視覚的に示し、身体に間接的に触れた。2回目以降、まずは机を挟んで向かい合うことで、療育構造を維持し、Thとの距離を視覚的に示した。身体感覚に働きかける活動に意識が向かった後半は、机を外して着席姿勢を維持して向き合い、足圧を加えた。Thの動きはA児にとっては予測が付きにくく、動きの意図がわかりにくいと考えられたため、構造の変化を少なくし、A児の掌や足裏を机や床につけるといように物理的構造との結びつきを維持するようにした。このような設定をしたところ、Thの動きへの注目は高く、身体感覚への働きかけ活動場面が共有され、要求表現が表出された。また、これまでは呼名のタイミングでなんとなく手を挙げて返事をしていたものが、呼名の後に周りの大人の顔を見比べてから手を挙げるなど活動外の場面で人を意識する様子もみられるようになった。この時期の終わりには、Thに対して分離不安を訴えるようになった。

## (2) 第Ⅱ期 情緒不安定で拒否が強かった時期

情緒不安定な場面が頻繁に生じた時期であった。活動の内容を図2に、A児の様子を表2に示す。

セッション	9	10	11	12	13	14	15	16
活動内容	伸ばした腕に指先で触れる	拒否が強く取り組めない			手遊びをしながら少しずつ腕や頬に触れる			
					シャボン玉を吹きかける			

図2 第Ⅱ期 身体感覚への働きかけ活動内容

風邪気味で鼻が詰まっている、室内が暑い、尿意を感じた時など生理的な不快感の高まりにより、些細なきっかけで情緒不安定となった。入室時点で表情がこわばっており、全身に緊張が走っているような日も同様の状態となった。このような時には、机を挟んで向き合う構造から着

表2 第Ⅱ期 A児の様子

活動中の様子	全身の緊張感が高く、些細な刺激で不安定になった。机を挟んで向き合えば、働きかけをある程度は受容することができた。10回目からの3セッションでは、身体の緊張とともに張り詰めたような感じや情緒不安定さがあり、活動に取り組めなかった。13回目になると、身体に触れる活動が再開でき、活動を喜んだり、期待する様子が見られた。シャボン玉の活動では、目や手で追うだけでなく、シャボン玉が触れた自分の体を見るなど身体への感覚にも注目し、自発的に要求のサインを表出した。
情動表出場面	療育場面全体では、Thに視線を向けることが増えた。指さしが出されたが、Thを見ることはなく、伝えたい相手には向かっていない、独り言のような表出であった。理解面については、情緒が安定していれば、Thの指さしを理解して応じることもでき、促せば指さしに注目することもできた。しかし、同じ目的の課題で使用教材が変わる、課題に取りくみたくないなど負の情動が生じると要求拒否が曖昧になり、叫び、教材を投げ、情動調整困難となった。Ⅱ期後半には、情動調整困難場面でも、使用していた教材をAThに向かって投げた。

席姿勢で向き合う構造へと変化させようとする、慌てて机を引き寄せたようにした。この行動はA児がThとの距離を保とうとする姿に感じられたため、離れすぎない距離感を模索した。

Thの行動への注目は引き続き高く、指さしやサインを理解して応じることもできた。情緒が安定している場面では、指さしや手差しなどで対象物を明確に指したが、まだ相手への注目は低く伝わりにくかった。しかし、この時期の終わりには、情動調整困難時に手にしていた教材を投げて負の情動を他者に向かって明確に表出した。また、鼻水がたまと顔を突き出し、生理的不快感を軽減するために助けを求めることができるようになった。

(3) 第Ⅲ期 身体感覚を通して外界を意識、自己身体像形成のめばえの時期

やや緊張感が高い状態は継続していた。机を挟んで向き合う構造を変えずに使用する教材を変化させた。活動の内容を図3に、A児の様子を表3に示す。

セッション	16	17	18	19	20	21
活動内容	刷毛やブラシで手から腕、肩、顔にかけて歌いながらふれる		直接身体全体に圧を加えたり、弛緩する	室内サーキット  ブランコ	机上で手から腕、肩、顔に触れる	刷毛やブラシで手から腕、肩、顔にかけて歌いながらふれる  机をはずしてふくらはぎに圧を加える

図3 第Ⅲ期 身体感覚への働きかけ活動内容

触れてほしいところを仕草で伝える、Thの真似をして自分の腕にブラシをあてるなど触れられた自分の身体に意識を向ける様子がみられた。情動調整が困難になっても、大きな音を出してThに介入を求めたり、固有感覚に刺激を入力して調整しようとする事があった。そこで、刺激入力をしていれば、固有感覚へ働きかけるかかわりを行い、教材を投げれば投げて入れる活動

表3 第Ⅲ期 A児の様子

活動中の様子	撫でられたところを眺めてからThを見る、Thがしたように自分の腕に刷毛を当てた。また、腕をこする仕草や押し付ける仕草を見せ、してほしいことを表現した。 情緒不安定でも、身体接触を求め、Thが身体に圧を加え弛緩すると徐々に鎮静した。もう一回など要求を伝えるサインは情動の混乱や興奮を伴わずに表出された。21回目には、Thの歌う童謡のリズムに合わせてThの腿の上に乗せた両足を打ち付けるようにリズムをとる遊びを共有し、楽しむことが出来た。
情動表出場面	情動調整が著しく困難になることは減った。情動調整が困難になると、Thの方を見ながら、座っていた椅子を軽く持ち上げて落とし、大きな音を出した。また、ぎゅっと目をつぶって自らの感覚に働きかけることもあった。Thが声をかけると、課題に取り組みながら情動の調整を図ることができたこともあった。課題のやり直しが必要な場面で情動が上がっても、わわわ……と声を出して訴えた。 また、課題がうまくいったと感じた時には腕を挙げて小さくガッツポーズをした。

に展開させるというようにA児が表出した行動を受け止め、療育環境の中で可能な形で表出できるように支援した。落ち着いて課題に取り組んでいる時には、Thのピアノに合わせて楽器を叩く、Thの教材提示の際の動作を模倣して応じるなど非言語コミュニケーションの育ちが認められた。

家庭においても同様の変化が認められ、A児の要求が明確になり母親の都合と衝突することが増えたという。母親はA児の意図がわかり、コミュニケーションをしている感覚がうれしいと話した。集団療育時や幼稚園においては、他児に向けられた情動表出は認められなかったが、他児の遊びの場にいることはできるようになった。

### Ⅲ 考察

#### 1. 情動調整に向けた表出行動の発達の变化

支援開始以前は、情動調整困難場面において、表出の向けられ先が曖昧で、表出しているうちに情動が上がって混乱してしまう状況があった。身体感覚への働きかけ活動を通して、対人意識が高まり、情動の表出先が定まり、情動調整を求めるコミュニケーションが成立するようになった。

第Ⅰ期には、環境にA児の身体が定位され、感覚を受容し、筆者の働きかけに意識を向けるようになった。感覚受容域が広がり、触れてほしいところを指し示そうとするなど要求表現の芽生えが見られた。しかし、要求の方向は拡散的で筆者側がA児のサインをくみ取り、応じていくことが必要であった。一方、トランポリン活動に見られたような動作の同調の芽生えは、情動共有の一步であったと考える。

第Ⅱ期には、生理的不快感による情緒不安定や全身の緊張感の高まりにより介入を受け入れられないことがあった。机を挟んで向き合う構造を変化させようとする筆者に対し、A児は机を戻して抵抗した。小林(1999)は、主体のこころ(身体)が強く萎縮している状態であれば、外的刺激は非常に強い動きの変化を伴って主体の中に飛び込んでくると述べている。A児の行動は筆



者という外的刺激との距離を保つことで、受け入れられる範囲内に刺激の強さを調整したと考えられる。

この時期のA児は、情動調整が困難になっても訴えかけるように目を見開いて筆者を見て、療育室から退室することなく情動を表出した。その後生理的不快感を解消するために助けを求めることができるようになり、持っていた教材を投げるといった拙い方法ではあるが、情動を他者に表出するようになった。

第Ⅲ期になると、情動混乱場面に介入を求め、筆者とのかかわりの中で調整しようとした。これは、他者の介入による反応調節（森中，2012）による情動調整と考えられる。

この経過からは、環境に自己を定位して筆者の働きかけを意識する→筆者の存在を意識し、かかわられている自己を意識する→環境の中で情動の乱れを表出する→その要因を取り除いてもらおうとする→情動調整困難場面に筆者の介入を求め調整をしようとするという発達的变化が考えられる。特に第Ⅲ期には情動調整困難場面に表出した行動を筆者と共有し、筆者からの働きかけに応じて活動を展開しながら情動の調整を図ることが出来た。情動調整困難場面において、支援者に向かって行動が表出され、また表出された行動を受け止めて応じるとそれを受けてA児が活動に向かいながら情動を調整していこうとするというコミュニケーションの一つの形が成立したと考えられる。

## 2. A児の支援における身体感覚への働きかけ活動

身体感覚への働きかけは、最も基本的なコミュニケーション手段であり、筆者からの身体感覚への働きかけを受容する過程は、身体を介したやりとりを共有し、他者からの働きかけになじんでいく過程であった。やまだ（2010）は、身体は外と内との境面であると述べる。そのため、外界の変化に共振して情動が揺れ動き、あるいは情動の揺れ動きは身体に表れ、身体内外は共鳴的に影響しあうことを指摘する。A児は感覚過敏を抱えていたが、外界の刺激を身体へと伝える感覚が過敏であることは、境面の脆さ、緊張と不安を強いられることを意味する。

筆者は浜田（2002）、宇佐川（2007）が述べているように、身体を起点として身体を通して外界にかかわっていくことが、認知発達のみならず外界へのかかわり方の広がり、自己像の発達へとつながっていくと考える。また、動作は単に自己と他者との間のコミュニケーションの道具ではなく、自己と自体の間のコミュニケーションの確立にとって重要な意味を持っているという今野（1988）の指摘は、第Ⅲ期の触れられた箇所を目で確かめる様子や、筆者にされたことを他者にするように促した際に触れられた自分の身体を見つめた様子から見てとれる。

本研究において実施した、A児が他者からかかわられているということ違和感程度に感じ取ることのできる強さでの身体感覚に働きかける支援は、感覚過敏の軽減、外界に対する緊張や不安の軽減につながり、自分自身の情動を受け止め表出するという自己と自体のコミュニケーションの確立にもつながるものと考えられる。

## IV むすび

本研究においてみられた情動表出の変化の経過は、情動調整困難に圧倒され振り回されていた段階から、環境の中に自分を位置付けながら情動調整困難場面に向き合う段階を経て、情動調整困難状況における情動表出方法が分化していく段階へと至る経過であった。他者に伝わりやすい形で明瞭に行動が表出し、また表出された行動を受け止めて応じるとそれを受けてA児が情動を調整していこうとするというコミュニケーションの一つの形が成立したと考えられる。また、自閉症幼児に対して実施した身体感覚へ働きかけるアプローチは、自らの情動を受け止める自己とのコミュニケーションにつながることを示唆された。情動の調整は、適応上も重要な課題となりうることから、今後も研究を積み重ね、情動調整の支援方略を検討していきたい。

### 【文献】

- 榎田祥代・菊池哲平 2011 自閉症幼児における動作法導入初期のプロセスについての検討～二項関係から三項関係の成立を目指して～ 熊本大学教育学部紀要人文科学, 60, 133-138
- 浜田寿美男 2002 身体から表象へ ミネルヴァ書房
- 今野義孝 1986 発達障害児に対する動作法の展開—身体への能動的な働きかけによる自己の確立— 文教大学教育学部紀要, 20, 20-33
- 今野義孝 1988 発達障害児に対する動作的アプローチの指導・訓練的要因に関する考察 文教大学教育学部紀要, 22, 73-85
- 今野義孝 1992 自閉症児のからだ・こころ・ことば論 (1) —「なぞり」の障害と意味理解の障害— 文教大学教育学部紀要, 26, 100-113
- 今野義孝 1999 発達心理臨床におけるタッチの意義 文教大学教育学部紀要, 33, 37-47
- 小林隆児 1998 自閉症の人々に見られる愛着行動とコミュニケーション発達援助について 東海大学健康科学部紀要 第4号 63-75
- 小林隆児 1999 社会情緒的発達と言語認知発達をつなぐもの—自閉症の関係障害臨床— 東海大学健康科学部紀要, 第5号, 9-18
- 小林隆児 2008 自閉症のこころの問題にせまる そだちの科学No.11, 2-9
- 串崎真志 田中友梨 2009 自閉症支援における情動共有の意義 関西大学人権問題研究室紀要, 第58号, 2009.09, pp.1-9
- 森野美央 2012 乳幼児期における情動調整研究の動向と展望 比治山大学現代文化学部紀要, 第19号, 2012, 107-116
- 森崎博志 2002 自閉症児におけるコミュニケーション発達と臨床動作法 治療教育学研究, 22輯, 41-48
- 森崎博志 2009 自閉症児への動作法—理論的背景と基本的な手続きについて— 治療教育学研究, 29, 9-26
- 名倉一美 2012 発達障害児の情動共有と情動調整の支援に関する一考察 (1) —情動調整に困難を抱える自閉症児に対する制作遊び支援の実践分析から— 浜松学院大学教職センター紀要 (1), 67-79
- 成瀬悟策 1992 教育における動作法の可能性 現代のエスプリ別冊臨床動作法 臨床動作法シリーズ②, 至文堂

- 佐々木博人 2008 自閉症研究のための試論 情動の重要性, 人間文化, 第11巻, 137-153
- 千川 隆 2016 自閉症の子どものための動作法—発達段階とそれに応じた支援— 熊本大学教育実践研究, 33, 45-55
- 宇佐川浩 2007 障害児の発達臨床Ⅰ 感覚と運動の高次化からみた子ども理解 学苑社
- 宇佐川浩 2007 障害児の発達臨床Ⅱ 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際 学苑社
- やまだようこ ことばの前のことば—うたうコミュニケーション— やまだようこ著作集第1巻 2010 新曜社
- 山谷奈緒子 自閉症児のコミュニケーション行動の変化について—情動的交流遊びを通して— 人間福祉研究, No.10, 77-92

### 【付記】

本報告は、匿名性への配慮、倫理的配慮の元作成し、研究協力についての承諾をA児の保護者から得ている。